

アメリカ日系人の信仰について

— 創立百年が過ぎた今、
果たして信仰は継承されているのか —

村 上 慧 香

1、はじめに

〈シアトル日蓮仏教会について〉

私は、2014年12月より2020年3月までアメリカ合衆国ワシントン州にあるシアトル日蓮仏教会の第16世主任を努めた。

シアトル日蓮仏教会について紹介をしたい。シアトル日蓮仏教会は、1916年7月、岡山県出身の数名の有志により、丘龍潮上人を第1世として日本より迎えて開かれた。丘上人が渡米の際に携えた「曼荼羅御本尊」と「日蓮聖人像」は、戦時期の混乱を乗り越えて、今でも大切にお寺に格護されている。特に、「曼荼羅御本尊」は、海外開教中興の祖とされる旭日苗上人が、遷化の前年となる1916年にお書きになったもので、「米国シヤトル教會常什」とあり、師のシアトル開教への強い期待が伺われる。傷みがあったが、2012年、立正大学の安中尚史教授の調査を経て、メンバー（檀信徒）の協力により修復が行われ、私の就任式の頃より節目の法要において掲げられてきた。いわば、シアトルにおける日蓮宗布教の象徴である。

現在のシアトル日蓮仏教会のお堂は、1929年、第3世沖原龍進上人の代に建てられたものである。この時、沖原上人は、日本を訪れ、全国のお寺を回り寄付を募ったとの記録がある。また、シアトルにおいては、当時は日系1世の時代であったが、その生活は大変苦しいものであった。とてもメンバーだけでは財力が足りず、広く日系社会に関わる人々の寄付により、本堂新築が実現した。

(2) アメリカ日系人の信仰について (村上)



シアトル日蓮仏教会外観

このことからわかるように、日系人は出身地や宗教宗派を問わず協力し合って、多くの苦難を乗り越えてきた。

お堂の外観は、写真からも見てとれるように、煉瓦造りで中央に階段があり、西洋風である。これは、日系1世たちが少しでもアメリカの風土の馴染もうとした証といえる。余談ではあるが、この外観は一般の通行人にとってもどこか畏敬の念を抱かせるらしく、治安面において助けられたと思うことが何度かあった。

2階部分が本堂となっているが、内部に長椅子が並ぶところも西洋風である。何脚もある古い木の長椅子は、全てに寄付した人の名前が墨書き（日本語）で入れられてある。ステージ状になっている内陣は一転して見事なまでの伝統的な純日本式である。大きな仏具もしつらえられており、それら全て船で運ばれ納められた。みんなでお金を貯めて少しずつ整えていったものと推察される。

その熱意に想いを馳せると、手を合わせずにはいられない。

お寺のある場所は、現在では「インターナショナル・ディストリクト」と呼ばれる地区の一角で、シアトルの中心部からほど近い場所にある。かつては周りに日系人が住み、日本人街（ジャパン・タウン）が広がっていたが、戦後、世代が下ると日系人は別の場所に住むようになり、お寺だけが残った形である。

第二次世界大戦の折、日系人が強制収容されていた頃にお寺はどうなったか、ということもここで説明する必要があるだろう。僧侶がいち早く収監された後、自分たちの身の危険も感じながら、メンバーたちは屋根裏部屋に仏像やお経本などを運び込んで隠した。そして、自らもキャンプ（強制収容所）へ向かった。お寺はそのようにして守られた。戦後、日系人たちが解放され、シアトルに戻り、1945年8月、シアトル日蓮仏教会は再開された。1947年には新たな主任が迎えられた。

〈日系仏教寺院が日系コミュニティに果たす役割〉

シアトル日蓮仏教会に限ったことではないが、アメリカ日系人社会にとってお寺は集会場でもあり社交場であり続けた。いわば、心の拠り所である。シアトルには、いわゆる伝統仏教の寺院として他に浄土真宗の寺院と真言宗の寺院があるが（現在は、さまざまな意味で多様化しているためそれには限らないのだが、ここでは限定させていただく）、この3つの寺院はお互いに助け合い、得意分野を活かしながら歴史を重ねてきた。シアトル日蓮仏教会でいえば、もてなし上手の寺として知られ、メンバーのご婦人方が腕によりをかけて美味しい料理を作り、日系コミュニティ全体で楽しいひとときを分かち合った。それは、信仰とは少し離れたところにあったが、苦労が多かった日系1世にとっては心を許せる場であったし、2世の子供たちにとっては、友達を作り、日本語や日本文化を身につける場となった。これも海外の日系コミュニティに根ざしたお寺の大切な役割であったと私は考える。

(4) アメリカ日系人の信仰について (村上)

〈日曜学校 (サンデースクール)〉

一方、信仰面で大きな意味を果たしたのが、日曜学校 (サンデースクール) の存在である。日曜学校がいつ頃から始まったのかについて何人か時を変えて質問してみたことがあるが、もう誰もわかる人はいないようであった。現在50代半ばとなる世代は日曜学校を経験しており、第9世の松田龍紹上人 (1969～1979年在任) や第10世の金井勝海上人 (1979～1988年在任) が、ご自身が生徒たちを自宅へ迎えに行った話をされていたので、1970年代にはすでにあったのは確かである。「自分が最後の生徒」のメンバーの話からすると、おそらく2000年ごろまで続いたようである。日曜学校において、子供たちは、紙芝居、塗り絵、工作といったアクティビティからお釈迦様の教えや日蓮大聖人のご生涯について学んだ。また、花まつりの折には自分たちで劇を上演した。御会式には飾り付けを手伝った。それらを通じて、信仰の自覚を促すと同時にコミュニティの結びつきを強めていった。一緒に野球をし、バレーボールチームを結成し、ピクニックへ行き、バンドを組み、といわゆる課外活動も盛んであった。それぞれ現在お寺にどのように関わっているかどうかは別として、彼らの友情は今でも続いており、2016年のシアトル日蓮仏教会創立百周年の折にはたくさんの卒業生が集まった。法華経の教えを共に学んだ生涯の友という意味で、日曜学校の果たした役割は大きいといえる。

〈日系何世?〉

アメリカに限ることではないが、日系人を語る上で、移住して何世代を経たか、ということが生活や行動規範に影響を与えるため、尺度として用いられることが多い。

移住した世代が1世となり、そこで生まれた子どもは2世となる。もっともこれは、20世紀初頭 (1920年頃まで) の頃に移住を果たした人々について言われることなので、例えば2000年代に移住した人について「日系1世」と呼ぶかと言えば、まずそのように呼ぶことはない。このため、大まかな括りではある

が、「日系1世」と聞いて現地の人がイメージする年代は大体定まっている。日系移民の歴史全体において最初の世代である「日系1世」を軸として捉えると、現在のシアトルにおいてお寺の活動を支えているのは、日系3～5世である。

上記を学術的に整理したものを拝見したことは無いが、現地に長く在住している佐々木豊氏が作成したチャートを、ご本人の許可を得た上でここに紹介したい(図1)。

「日系1世」「日系2世」と世代が移っていくが、その中で並行して現れてくる「帰米2世」についても紹介したい。「帰米2世」とは、大変特徴的な存在である。「日系1世」の両親はその多くが、アメリカで生まれた自分たちの子供を日本で教育したいと考え、日本にいる両親や親族に託して学齢期を過ごさせた。その子どもが教育課程を終えてアメリカに戻った場合、「帰米2世」となる。これは一般的には第一子(とりわけ長子の男子)に対して行われたので、同じ家族内でも「兄は帰米2世だが、私は2世」ということになる。人生の多感な時期をアメリカで過ごしたか日本で過ごしたか、また、アメリカの教育を受けたか日本の教育を受けたか、ということはその後の人生に大きな影響を与えるため、同じ家族の中でもきょうだいで全く考え方が異なったりする。場合によっては、第二次世界大戦中に兄は日本軍に従軍し、弟はアメリカ兵として戦った、ということもあった。

このように考えていくと、「第一子でない帰米2世は存在しない」とか「帰米3世という存在はあり得ない」ということになるのだが、家庭内の事情はさまざまであること、アメリカ本土へ定住する前にハワイに入植しているケース(ハワイの方が移民の歴史が古い)、などを考慮に入れると「帰米」の範囲は広がることになる。

また、同様の考え方で、「日系1世」の父と「日系2世」の母の間に生まれた子どもの場合、「2世」なのか「3世」なのか、についても自身のアイデンティティの捉え方によってさまざまで、「2世」と答える人もいれば、「2. 5

世（2世半）」と称した人もいた。また、父が「1世」、母が「3世」の子どもについて言えば、父系によると「2世」、母系によると「4世」とかけ離れてしまう。

父系と母系どちらかに統一して考えるべきという整理の仕方もあるが、それでは本人のアイデンティティを否定してしまうことになりかねないので、本論文においては帰米（の本質）についても世代の数え方についても柔軟に表記することとしたい。

2、インタビューについて

私は2015年より2024年にわたってシアトル日蓮仏教会のメンバーとその家族にインタビューを行ってきた。発端は2015年11月に、シアトルのチャイナタウンにある「Wing Luke Museum」というアジアの文化に焦点を当てている博物館から、ある方のオーラル・ヒストリーを記録するためのインタビュアーをやってみないかというお話をいただいたことにさかのぼる。その方は、帰米2世の90代の女性で、先に他界した夫とともにシアトル日蓮仏教会において戦前から2015年当時に至るまで大きな役割を果たしてきた人であった。英語も堪能であったが、主言語が日本語であることと、普段から接する機会のある立場の者がインタビューをするほうが安心して話せるだろうということで、私にお話をいただいた。インタビューは、機材の関係で博物館の一室で行われた。インタビュー内容はアーカイブとして保存されるため、注意事項の確認や本人の承諾を経て丁寧に進められた。年齢も考慮し、1時間の予定であったが、2時間を超えてお話しいただいた。この時の経験から、インタビューをする上での心がまえやその進め方、相手の反応など多くのことを学ばせてもらった。そして、戦前戦後という変革期を過ごしてきた方の生の声を聞くこと、それを残すことの意義を実感した。殊にシアトル日蓮仏教会のメンバーについては、自分がインタビューをすることで何か恩返しができるのではないかと思った次第である。

翌2016年7月、シアトル日蓮仏教会は創立百周年を迎えた。そして、10月に

(8) アメリカ日系人の信仰について (村上)

は記念法要が行われた。この時、百周年を祝う記念誌を作成し、お寺の歴史や寺室についてあらためてメンバーとともに知見を深めた。大きな節目を終えて私は、自分が次にできることは何であろうかと考えた。記念誌においてはお寺の歴史を振り返った。お寺は人（メンバー）の支え無しには成り立たない。メンバーにはメンバーの歴史、その人それぞれのお寺への想いや関わり方があるはずで、人の歴史とお寺の歴史はいわば縦軸と横軸のように相関してシアトル日蓮仏教会を構成し、今日まで続いてきたのだと考えた。ならば今度はメンバーの歴史に焦点を当てたい。メンバーにインタビューをし、その記録をすることでシアトル日蓮仏教会に貢献したいと考えた。

2017年の春ごろより、メンバーへのインタビューを始めた。場所は本人の自宅またはお寺とし、できる限りリラックスできる環境で話してもらうように努めた。時間は1時間を目安とした。対象者の体調や生活状況を考慮し、天候も踏まえ、無理のないスケジュールで行った。家族の同席も歓迎した。そのようにして、インタビューを進めていったが、2020年初頭、新型コロナウイルス感染症のために続けることが難しくなってしまった。また同時期に私の米国ビザも期間満了を迎え、本帰国することとなった。

インタビューについてはかなり心残りがあったが、コロナ禍のもと渡米というわけにはいかずに数年が経った。2024年5月、調査のための再渡米を果たし、さらなるインタビューを行うことができた。

本帰国前のインタビューでは、それぞれが歩んできた歴史、とりわけ戦時中の強制収容やシアトル日蓮仏教会との関わり方に焦点を当てていた。日本へ帰国しシアトル日蓮仏教会を客観的に見るうちに、信仰の継承という点も大いに気になった。そこで、2024年のインタビューにおいては、世代間の宗教観の違いや信仰の形についても質問をした。

インタビューの詳細は、表1の通りである。ご覧の通り、この数年の間に他界された方が多い。自身の歴史の大切な部分をお話くださったことに感謝し、ここにご冥福をお祈りしたい。

Aファミリー				
	A-1さん	A-2さん	A-3さん	
年長者からみた続柄	本人	子	孫	
日系何世?	婦米2世	3世	4世(母系)/2世(父系)	
母系/父系/両方?	両方	両方	上記のとおり	
日本で教育を受けた年代	10歳~24歳	大学時代	大学時代	
生年	1923(大正12)年	1951(昭和26)年	1989(平成元)年	
インタビュー日時	2017年5月11日	2024年5月31日	2024年5月31日	
インタビュー時の年代	90代	70代	30代	
強制収容経緯	無(日本)	無(戦後生まれ)	無(戦後生まれ)	
家族	夫、息子2人、娘2人	夫、娘2人、息子1人	妻	
いつからメンバー?	結婚	親がメンバー	親がメンバー	
日曜学校	子どもが○	子どもが○	子ども無	
子への信仰継承	子のうちの2人は特別法要参加、2人は行事を手伝うのみ	子のうちの1人は特別法要参加、2人は行事を手伝うのみ	/	
特記事項	2023年他界			
Bファミリー				
	B-1さん	B-2さん	B-3さん	B-4さん
年長者からみた続柄	本人	妻	子	子
日系何世?	婦米3世	日本より嫁ぐ	4世	4世
母系/父系/両方?	両方	日本生まれ	父系	父系
日本で教育を受けた年代	9歳~15歳	結婚まで日本	大学時代	
生年	1935(昭和10)年	1944(昭和19)年	1965(昭和40)年	1969(昭和44)年
インタビュー日時	2024年5月25日	2024年5月25日	2024年5月25日	2024年5月25日
インタビュー時の年代	80代	80代	50代	50代
強制収容経緯	Rohwer, AR→Tule Lake, CA	無(日本)	無(戦後生まれ)	無(戦後生まれ)
家族	妻、息子1人、娘1人	妻、息子1人、娘1人	妻	夫
いつからメンバー?	戦後助けてもらったシートル日蓮仏教会主任に感銘を受け、浄土真宗より宗旨替え	結婚により	親がメンバー	親がメンバー
日曜学校	子どもが○	子どもが○	子ども無	子ども無
子への信仰継承	行事は手伝うが、サービスへの参加はほぼ無	行事は手伝うが、サービスへの参加はほぼ無	/	/
特記事項	/			
Cファミリー				
	C-1さん	Dさん	Eさん	Fさん
年長者からみた続柄	本人	/	/	/
日系何世?	婦米2世	婦米2世	婦米2世	婦米2世
母系/父系/両方?	父系	父系	両方	父系
日本で教育を受けた年代	4歳~19歳	?~17歳	12歳ごろ~39歳	13~17歳
生年	1928(昭和3)年	1919(大正8)年	1925(大正15)年	1928(昭和3)年
インタビュー日時	2017年12月13日	2015年11月9日	2017年5月16日	2017年12月1日
インタビュー時の年代	80代	90代	90代	80代
強制収容経緯	無(日本)	Tule Lake, CA→Minidoka, ID	無(日本兵として出征)	Tule Lake, CA
家族	妻、娘3人	夫	妻、息子1人、娘2人	妻、娘1人、息子2人
いつからメンバー?	母親の再婚を機に	結婚(1938年)	養親が日蓮宗信徒	母がメンバー
日曜学校	子○	子ども無	x	子どもが○
子への信仰継承	子どもが○	/	行事は手伝うが、サービスへの参加はほぼ無	行事は手伝うが、サービスへの参加はほぼ無
特記事項	2021年他界 妻をC-2さんとしてケース紹介	2018年他界	米国に戻ったのち2010年頃までシカゴ在住	2019年他界
Gファミリー				
	G-1さん	G-2さん	Hさん	Iさん
年長者からみた続柄	本人	妻	/	/
日系何世?	2世	婦米2世(2.5世)	2世	2世
母系/父系/両方?	父系	父系(父は日本生まれ)	父系	両方
日本で教育を受けた年代	/	6か月~13歳	/	/
生年	1935(昭和10)年	1945(昭和20)年	1918(大正7)年	1938(昭和13)年
インタビュー日時	2017年9月29日	2017年9月29日	2018年2月1日	2024年6月1日
インタビュー時の年代	80代	70代	100歳	80代
強制収容経緯	Minidoka, ID	Tule Lake, CA(生まれ)	無(ハワイ)	Tule Lake, CA
家族	妻、娘	夫、娘	夫、息子3人、娘1人	夫、娘1人、息子2人
いつからメンバー?	親がメンバー	親がメンバー、婿家も	結婚	親がメンバー、婿家も
日曜学校	不明	不明	不明	自身は先生、子ども○
子への信仰継承	x	x	x	娘は日曜法要に参加、息子2人は行事は手伝うが、サービスへの参加はほぼ無
特記事項	2021年他界	曾祖父がお寺創立メンバー/娘の住むアメリカ南部へ移住	/	/

(表1) インタビュー一覧(網かけは本論文にてケース紹介)

(10) アメリカ日系人の信仰について (村上)

続く項では、このうち3つの家族について、インタビューの内容をもとに、信仰の継承について見ていきたい。なお、これから先に出てくる用語についてここで説明をする。

- ・「チャーチ」……シアトル日蓮仏教会のメンバーは、お寺のことを「チャーチ」と呼ぶ。これも、日系人が現地文化に溶け込もうとした意志の現れと見てとれる。ここでは、あえて話された言葉のままに書きたいと思う。
- ・「特別法要」……シアトル日蓮仏教会においては毎週日曜日に「日曜法要（日曜礼拝）」が行われていたが、お盆やお彼岸、花まつりや御会式といった法要を「Special Service（特別法要）」と呼んでいた。「特別法要」だけ参加するという人も多い。
- ・「イベント（行事）」……主に、お寺の経済基盤を支える活動としての「ファンドレイズ」を指す。チャーメン（炒麺）を作ったり、各家庭のお正月用にお餅を作ったりし、その売上はお寺に寄付される。そこに宗教的な意味合いは薄く、手伝う側も購入する側も、シアトル日蓮仏教会のメンバーに限らない。
- ・「先生」……「シアトル日蓮仏教会主任（日蓮宗教師）」のことを伝統的にそのように呼ぶ。

3、Aファミリー

〈ファミリーの歴史〉

婦米2世であるA-1さんの父は1907年にシアトルへ入植した。シアトルで日系人の入植が始まったのは1890年頃からなので、古い移民といえる。母親を早くに亡くした後は母方の祖父母と米国内で暮らしていたが、10歳の時に祖父母とともに日本へ帰国した。第二次世界大戦は日本で経験し、1948年に帰米した。同年、結婚。戦後に初めてチャーチで結婚したのは自分ではないかと話していた。4人の子どもが生まれた。とても明るいい人で、どんなに大変なことも笑い飛ばしてしまうようなところがあった。90代になっても自身で車を運転し

てお寺にお参りに来ていた。私が着任した頃、ご夫人はすでに他界していたが、お参りの時にはいつもご夫人の写真を胸に抱いていた。

A-2さんは、日本語が達者だった2世の父と帰米2世の母(A-1さん)のもとで育った。大学時代を日本で過ごしていることもあり、自身もとても日本語が上手である。夫が日本人ということからも、普段の生活からして日本式なところが多いようだ。細やかな気遣いの人である。

A-3さんは、A-2さんの第3子である。日本で学んだり、長期滞在をした経験は無いが、日本語が堪能で、とにかく日本が大好きである。アメリカ人らしい陽気さをにじませる意思の強い人である。お寺が大好きで、自分の人生に欠かせないものと言い切る。お題目には強い力を感じ、タトゥーを入れるほどである。自分はいつもお題目とともに生きていると話す。父親は日本生まれなので、父系で行くと2世、母系で行くと4世となる。特に区別して考えたことは無いそうである。

3人とも都合がつく限り、特別法要に参加する。A-1さんは時々日曜法要にも来てくれていた。

〈日曜学校のこと〉

A-2さんについて、自身が日曜学校に通ったという話は無かった。3人の子どもたちは皆、日曜学校に通った。先生が車で迎えに来てくれて、親よりも一足先に家を出たそうである。親が法要をしている間はアクティビティ(塗り絵や工作、時には数珠作りなど)をし、その後で子どものための法要に参加した。そこには学校とは違う世界があり、仲間がいて、とても楽しかったそうである。一緒にピクニックをしたり野球をしたり、課外活動もたくさんあった。

ただ、だんだんと日曜学校に参加する子どもたちの意識は変わっていったと言わざるを得ない。主な理由は2つあるようだ。1つ目は、子どもたちが英語の方が話しやすくなってしまったこと、2つ目は週末が他の用事で忙しくなっていったこと、であった。

(12) アメリカ日系人の信仰について (村上)

1つ目の理由について、日系の親たちにとってはお寺に来たら日本語が話せることが大変嬉しかった。お寺は自分たちのルーツを感じられる場所で、心おきなく日本語が使える場所であった。当然のように、子どもたちにも日本語を使ってもらいたいと考えていた。しかし、子供たちは、学校は英語を使うため、英語の方が理解するようになっていった。先生が話すことを理解しにくくなっていった。

第2の理由として、子供たちがスポーツなどで忙しくなると、週末にも活動があったり試合があったりするようになる。そうした中で、どうしてもお寺に足が遠のいてしまうというということがあったようだ。

それでは、日系の子どもたちはどこへ行ったのか？日系のキリスト教会の日曜学校へ通った子が多かったという話を聞いた。そこでは、英語が使え、日系の子どもたちに会えた。そこにバスケットボールなどのチームがあれば、スポーツもできた。

A-3さんが日曜学校へ通っていたのは2000年に近い頃で、その頃には生徒はもう3人しかいなかった。しかも、A-3さん以外の2人は当時の主任のお子さんたちであった。その主任が去った時に日曜学校の歴史も幕を下ろしたようである。

〈自身の信仰について〉

自身の信仰について、A-2さんとA-3さんに聞いてみた。A-2さんによれば、自身も含めその世代は、親の信仰をそのまま受け継いでいると答えてくれた。インタビューをする機会は無かったがA-2さんには妹がおり、やはりお寺の特別法要に参加してくれている。どちらもシアトル日蓮仏教会をととても大切な場所と考えてくれているのは明らかで、それは、両親が護持丹精する背中を見て受け継いだものようである。そこに、迷いのようなものは感じられなかった。

A-3さんは、自分のお寺はシアトル日蓮仏教会以外にはあり得ないと言

切る。A-1さんにとって一番年下の孫であったA-3さんは、両親が仕事で忙しかった時など、A-1さんと過ごす時間が長かったし、とても可愛がられた。祖母と一緒にお寺へ来た彼は、ある時、お題目にとても強い力を感じたという。それ以来、自分はお題目に守られていると感じているそうである。

A-3さんに、「シアトル日蓮仏教会の今後はどうなると思うか」と聞いてみた。(本人にまだ子どもはいないが)「自分と自分の子どもが最後のメンバーになるかもしれない。それでも自分はここを守っていく」と力強く答えてくれた。さまざまな誘惑の多い世代かと思われるが、そこには強い信仰心があり、「信仰が受け継がれていること」を感じた次第である。

4、Bファミリー

〈ファミリーの歴史〉

B-1さんは、ハワイ出身の父とワシントン州出身の母のもと、カリフォルニア州で生まれた帰米3世である。祖父母は父方母方ともに広島出身であった。若い頃は苦難の連続であった。戦争中、収容所を転々としたのちに1945年、終戦直後に家族で日本へ帰国した。横浜の港から原爆投下後の広島へ、随分と長い日数をかけて向かったそうである。しかし、当地で待っていると思っていた母方の祖父はすでに他界していたため、頼る人もいなければその日食べるものにも困る日々であった。学校に行けばいじめられた。1950年、米国にいた縁者の助けでアメリカへ戻った。それから、縁者の農場の手伝いをしたり、白人家庭に住み込みで手伝いをしながら高校へ通うという日々であった。その間に米軍兵として韓国にて従軍。縁者の親戚であったB-2さんと結婚し、その後にガーデナー(庭師)となり生活の基盤を作った。子どもたちには自身がしたような苦労はさせたくない、と一生懸命に働いた。今は、引退して穏やかな暮らしをしている。

一度日本へ帰り、また米国に戻っていることから、B-1さんを「帰米3世」とさせていただいた。彼は3世であること、日本に帰ったのは止むに止ま

(14) アメリカ日系人の信仰について (村上)

れぬ事情からで教育が目的では無いことからすると、先述の一般的な概念の「帰米」とはかなり異なる。まれなケースである。

B家はもともと浄土真宗の家系である。B-2さんの実家もそうである。戦後、日本からアメリカに戻って苦しい生活をしてきた時、助けてくれたのがシアトル日蓮仏教会第7世の生田観周上人だったという。1950年代のことである。B-1さんだけでなく、お金の無い若者にご飯を食べさせてくれたそうである。厳しい日々の中で、さぞ心身ともに救われたことだろうと察せられる。その姿に感銘を受け日蓮宗に宗旨替えをし、今に至る。その時に食べた温かいお茶漬けのことは今でも忘れられないという。結婚したB-2さんも積極的にお寺に関わるようになり、以降大変お寺に尽くして下さっている。若き日の苦労話を聞くと想像を絶するが、それを感じさせないお2人である。いろいろな意味で、稀有な存在である。

B-3さんとB-4さんは、そのような両親のもとで育った。幼い頃からお寺に関わってきたものと思われる。行事においては何かと助けてくれるのだが、これまでなかなかゆっくりと話す機会が無かった。この度、それぞれの伴侶とともにお話を聞くことができた。お2人とも、物静かで穏やかな方である。

〈日曜学校のこと〉

B-3さんとB-4さん、ともに日曜学校に通っていた。その頃のことをどう思い出すか、聞いてみた。このファミリーはシアトル市ではなく、隣の市で育っている。シアトルにいれば、当時は日系人が住む地区は定まっていたために学校に日系人が少なからずいたようであったが、当時、彼らの学校には日系人が全くいなかったという。アジア系すらほとんどいなかった。そのような環境の中で、日曜学校に来れば自分と同じルーツを持つ友達と会えることはとても嬉しかったという。このため、中学校に上がってからも日曜学校へ通い続けたし、今でもその時の友人とは親交があるという。一緒にバンドを組んだこともあった。

日曜学校のことは良い思い出になっているという。

〈自身の信仰について〉

B-1さんとB-2さんについては、体の許す限り、特別法要はもちろん日頃から日曜法要に出席してくれている。B-1さんについては、何をするにも手を合わせて「南無妙法蓮華經」、B-2さんについては、教義を理解しようと本を読んだり調べ物をしたり、と2人揃って大変に熱心であった。法華經の教えは2人の中にしっかりと根付いているようである。

B-3さんとB-4さんについては、2人とも特に法要には参加していない。イベントには参加し気持ちよく手伝ってくれるのだが、そこからもう一歩すすんで法要へ、とはならないようである。親も特段それを勧めることはしない。B-4さんは自身の信仰（日本の新宗教）を持っており、夫とともに熱心に勉強・活動をしている。自身がその信仰へ入るきっかけとなったのは大学時代の日本への留学の時のことで、その団体にずいぶん助けられたのだそうだ。

2人に次のように聞いてみた。「両親の信仰は2人に受け継がれているの？」と。答えは、私にとって意外とも思えるもので、2人とも「イエス」という返答であった。B-3さんにとっては、「だからこそ、両親のお寺を手伝うんだ」というものであったし、B-4さんにとっては、「それがあるから今の信仰がある」と言う。私はその返答を聞いて、アメリカの宗教観は、個に基づくことは感じていたが、奥行きも広がっているように感じた。

〈日系人？日本人？〉

B-3さんの妻は日本生まれ日本育ちの人である。この日の会話の中で、「私は日系人じゃない、日本人だから。」とはっきりと言っていたことが記憶に残る。B-2さんも同じく日本育ちであるが、本人の意識は「日系人」である。この違いはどこから来るのだろうか。

前掲の佐々木豊氏が作成したチャート（図1）を再び見てみる。B-2さん

(16) アメリカ日系人の信仰について (村上)

は、「新1世」にあたると考えられる。「新1世」にも幅があるが、B-2さんの場合は高度経済成長期を経験した上で日本文化をアナログで持ち込んだ世代と言える。一方のB-3さんの妻の場合はそれより一世代下がり、情報の流通が当時よりもずっと早くなっているわけであるから、もはや人を介する必要もないわけである。日本文化の担い方も違えば、日本との距離感も異なるわけで、なんとというか、ずっと軽やかにそのギャップを飛び越えているような感じがした。その代わり、「日系人」という認識も特に無い。それは、私が当地で接した日本人の家族（お寺とは特に関係の無い）についても同様であった。

5、Cファミリー

〈ファミリーの歴史〉

C-1さんは、よくご自宅に訪ねさせていただいた。過去にはシアトル日蓮仏教会の理事長をおつとめになった方で、妻（C-2さんとさせていただく）とともにシアトル日蓮仏教会を盛り立ててくださった。訪ねた時はいつも、手作りの美味しい和食を振る舞っていただいた。インタビューではC-2さんもそばにいていただいてお話を伺った。お子さんやお孫さんにインタビューする機会は残念ながら無かったが、おうちを訪ねた折に一緒にお食事をしたりお寺の行事を共にお手伝いするなど交流があった。

婦米2世であるC-1さんは、戦後19歳でアメリカに戻ってから、実母の再婚相手が日蓮宗信徒だったことにより、シアトル日蓮仏教会との縁が始まった。書道など日本の文化に造詣が深く、相撲が好きで、心の底から日本人という感じであった。日系の諸団体の役員を歴任するなど、シアトル日系社会に深く根ざした方であった。

C-2さんもまた、華道の心得など、日本文化に精通している。お供えのお花や特別法要の供膳といった大切な部分でいつも助けていただいた。殊に毎年12月にお供えの鏡餅を作る時には、C-2さんの働き無しにはできないほどであった。

前述の第7世生田観周上人は、「米国書道研究会」を立ち上げ、シアトル日蓮仏教会の施設を使って今も書道教室が続けられている。C-1さんもC-2さんもその活動に長く携わってきた。

C-1さんがいつもご自宅では日本の新聞にじっくりと目を通していたことが印象的であった。インタビューの折、アメリカより日本が好き、とはっきりと言い切った様子はたいへん清々しいものであった。

3人いるお子さんは自身のパートナーや子どもとともに折々夫妻を訪ね、楽しい時間を一緒に過ごしてきた。

〈日曜学校のこと〉

3人のお子さんとも日曜学校に通っていた。両親の背中を見て育ち、日曜学校で子どもの頃から学んでいるため、自宅ではお仏壇に必ず手を合わせる。節目にはお墓参りをする。ただ、お寺の法要に参加することはほぼ無い。行事のお手伝いはやってくれていた。

C-1さんは、「人それぞれに生き方がある」と話した。だからとやかく口出しはしない、ということであった。

〈自身の信仰について〉

私が着任した頃、C-1さんはすでに病を抱えておられ、特別法要のお寺参りがやっと、という状態であった。写真にある通り、シアトル日蓮仏教会の本堂は建物の2階部分にある。現在は外の階段を使う者はほとんど無く、屋内に2つある階段を上って本堂へ入る。階段のうちの1つには昇降機が据えられ、大変役に立っている。しかし、建物1階に入るにも3段ほどの階段があり、難儀である。

そういった状況にあったので、私は折に触れてC-1さんを訪ねてお宅へ伺い、お仏壇の前でお経をあげさせてもらった。C-1さんはいつも丁寧に迎えてくださり、一緒に読経できることの喜びにしみじみと浸っていらっしやるよ

(18) アメリカ日系人の信仰について (村上)

うだった。

聞けば実母とはそれほど近い関係では無かったそうだが、青年期を過ぎたところで日蓮宗と出会い、芯のある信仰を自身の中に育んだことはお寺に大きな吸引力があったといえそうである。

一方のC-2さんは東北の旧家で何不自由なく育った。実家は先祖供養などを丁寧にする家だったという。このため、夫が行くお寺には自分も当然ながら関わっていく感覚だったのではないか。C-2さんが日本で身につけた日本文化のたしなみや料理の腕は、お寺で存分に発揮されていた。

6、まとめ

以上、3つの家族のケースを見てきたが、果たして信仰は継承されていると言えるのだろうか。アメリカは日本よりも個人主義が進んでいるのは周知の事実だが、信仰についても個人化が進んでいるのだろうか。

Aファミリーについて、3世代にわたり日蓮宗の信仰が受け継がれていると見て取れる。しかもその信仰は、「自分はお題目に守られている」というような大変強いものである。特に、若いC-3さんにとっては祖父母と過ごす時間が長かったこと（両親が働いていたため、学校から帰ると祖父母宅に行った）が影響したと思われる。さまざまな選択肢があった中で、法華経の教えがしっかりと身につけていること、本人がそれを自覚していること、は歴代の主任が丁寧に彼に教えを伝えてきたことによるものと考えられる。

Bファミリーについては、現状、子どもたち（B-3さんとB-4さん）はシアトル日蓮仏教会の法要には参加していないが、それが「信仰が継承されていない」と捉えていないことが興味深い。シアトル日蓮仏教会は親のお寺であり自分は日常的には通わないが、そこで培った信仰の種を自分なりに育てている、というように見えた。B-3さんにとってはそれがボランティアに参加することなのだろうし、B-4さんにとっては別の宗教団体だったのだろう。一方の親たち（B-1さんとB-2さん）は、浄土真宗の家で育ちながら、日蓮

宗に出会い、宗旨替えをした。日本で育ったB-2さんは、広島で育った20歳過ぎまで地元の浄土真宗寺院の日曜学校に毎週通っていたという。勉強熱心な人で、お寺にある法華經に関する書物を家に借りて帰って読むほどである。いつも、「ありがたい」という言葉を欠かさない。

信仰を継承するとは、B-3さんとB-4さんにとっては必ずしも親の信仰をそのままに受け入れるということでは無いようである。両親の背中を見て得た価値観、シアトル日蓮仏教会の日曜学校で学んだ仏教の教え、日蓮大聖人のお言葉、そう言ったものを自分の中で自分に合うものに作り上げていく、そういうもののように感じられた。それは、宗教の個人化と言えるだろうし、宗教観自体が奥行きを持って広がっていと捉えることもできるだろう。

Cファミリーについては、客観的に見る限り信仰の継承はなされていないのかもしれない。しかし、C-1さんとC-2さんの孫たちは祖父母宅を訪れるとまず仏間へ行き、お線香を点け、手を合わせるという。それは、自分の親や祖父母の背中を見て行動していると考えられる。そこに信仰の種は存在すると思うのである。ふとしたタイミングからシアトル日蓮仏教会と積極的に関わりを始めるのかもしれない。自分のルーツを深く知るために教えを聞きたいと思うのかもしれない。連綿とではなく、そういう形で信仰が継承されることもあり得る。

実際、私の在任中にもお寺に縁のある方が自身のルーツを知るためにお寺を訪ねて来たことが何度かあった。その際、本堂内の長椅子に書かれた曾祖父の名前を見せたり、先祖が写った古い写真を見せたりすることで先祖について具体的に知ることができると、心底嬉しそうな表情をしていたことが今でも印象に残っている。それを契機としてお寺に関わるようになってくれた人もいる。

海外においては、家族の遺品の中に「南無妙法蓮華經」と書かれたものがあった、シアトル日蓮仏教会の名の入った書物があった、ということだけでも十分に信仰の種となり得る。信仰の継承の形は、必ずしも「父親がこのお寺にお世話になっていたから、自分も同様に」とか、「長年家族会員としてメンバー

(20) アメリカ日系人の信仰について (村上)

費を払ってきたから」といった理由ばかりではないと考えられる。一方で、「その気にならなければ簡単に疎遠になれる (自由度が高い)」とか、「仏教であればお題目じゃなくても良い」「自分がきちんとできていると思えばそれで構わない」というような方向にも向きがちである。それらの判断は多くの場合個人単位となり、家族内においても様々な意見があり得る。そういった信仰の種の多様性や自由度の高さをお寺の側も受け容れ、柔軟な対応と魅力的なお寺作りをすることが不可欠であると考ええる。

7、結びにかえて

第二次世界大戦中に強制収容された日蓮宗の信徒たちがキャンプ内において花まつり法要を営んでいる写真を拝見したことがある。不便な生活の中でどのようにして準備したのだろうと思い、強制収容所の跡を訪ねたが、とても想像できないほど過酷な場所であった。

年月を経るうちに様々な感情を乗り越えてきたと察せられるが、強制収容についてをお聞きした方のほとんどが、「両親と過ごす時間が増えて嬉しかった」、「日系人が皆で一緒に過ごせて楽しかった」と話してくれたことが印象的であった。

シアトル日蓮仏教会のメンバーそれぞれが経験してきたことや抱えてきた想いをどうにかして残せないかと考えて始めたインタビューであったが、多くのことに気付かされ、学びを得る機会となった。インタビューをした人の中にはすでに鬼籍に入られた方も多く、もっとお話を聞きたかったという想いに駆られる。関わってくださった皆様に感謝申し上げるとともに、語られた言葉を後の世に紡いでいけたらと思う。